

素朴画とスイスの牧人習俗

岡部由紀子

2009年9月12日 朝日カルチャーセンター立川

スイス・アッペンツェル地方の人々が、日々の営みの合間に描いてきた素朴な絵(Senntumsmalerei)が、にわかに関心を集めたのは、1941年 Basel で開かれた「スイスのフォークアート」という展覧会でした。

発見されている素朴絵は16世紀に遡ります。描き手が誰かわからない絵も多いのですが、19世紀初めからは作者が特定できるものが増え、ほとんどの絵が苦境の中で生まれてきたことがわかっています。

多くの絵のモチーフは、晴れ着を着た牛飼いの牧人(Senn)と肥えた牛たちです。なかでも初夏に高地放牧地・アルプ(アルム)へ牛を追上げるアルプ行列にちなんだ絵が数多く描かれました。



図1: Conrad Starck コンラート・シュタルク作
Fahreimer Böldli 桶の飾り絵 1823年

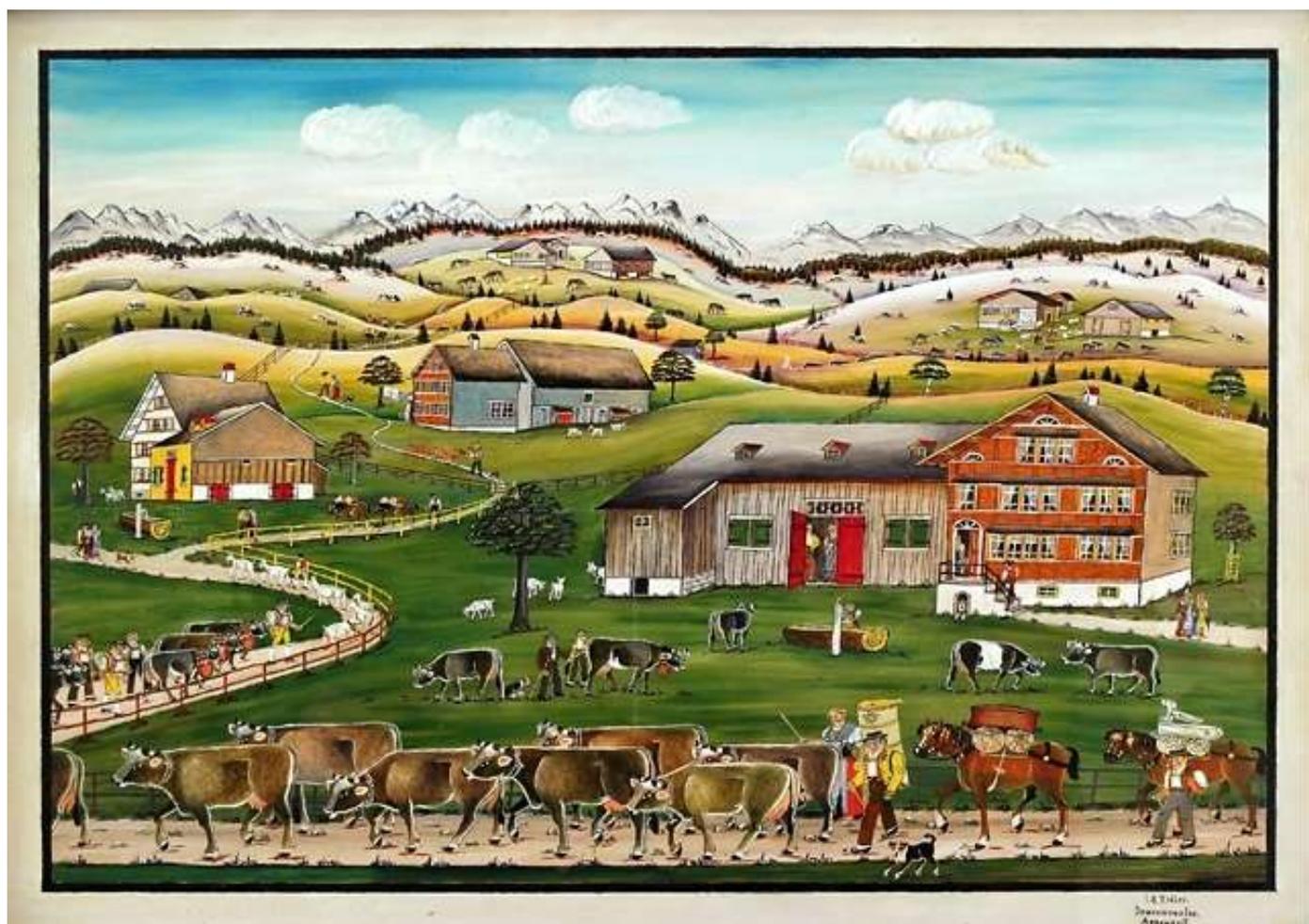


図2: Johann Baptist Zeller (1877-1959) ヨハン・バプティスト・ツェラー作 20世紀初頭
Alpahrt vor Landschaft mit Bauernhäusern 農家が点在する風景の中を進むアルプ行列。並び順は決まっている。先頭は牧童の少年とヤギ、その後に牧人と牛、牛の後に農夫とアルプで使う道具が続く。



図3: Johannes Zülle (1841-1938) ヨハネス・ツュレ作 Schellenshötten 1880年頃
 アルプに到着し、カウベルを揺らしながら素朴なヨーデルを歌う牧人たち。飾り絵のついた桶が右下に見える。

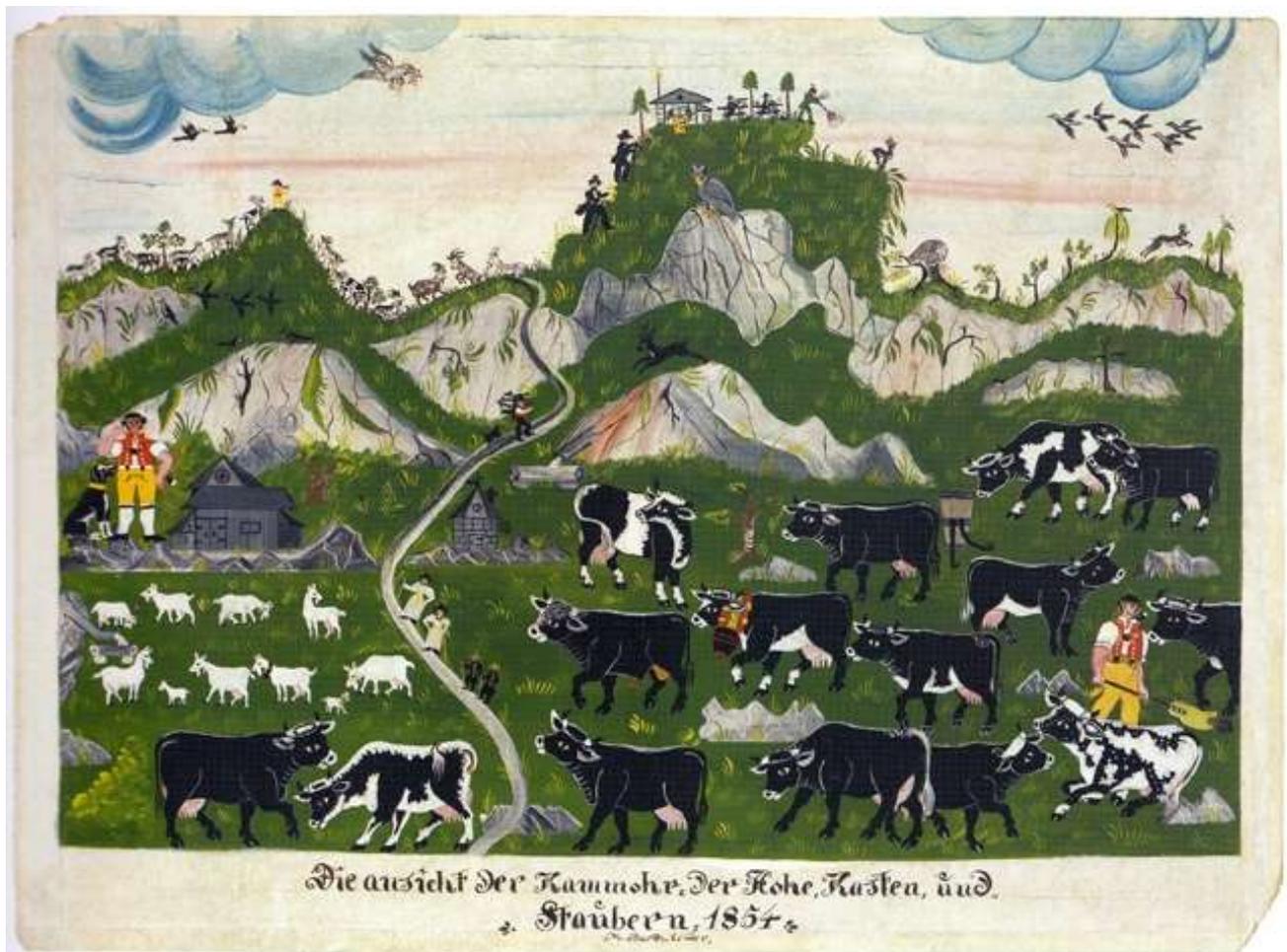
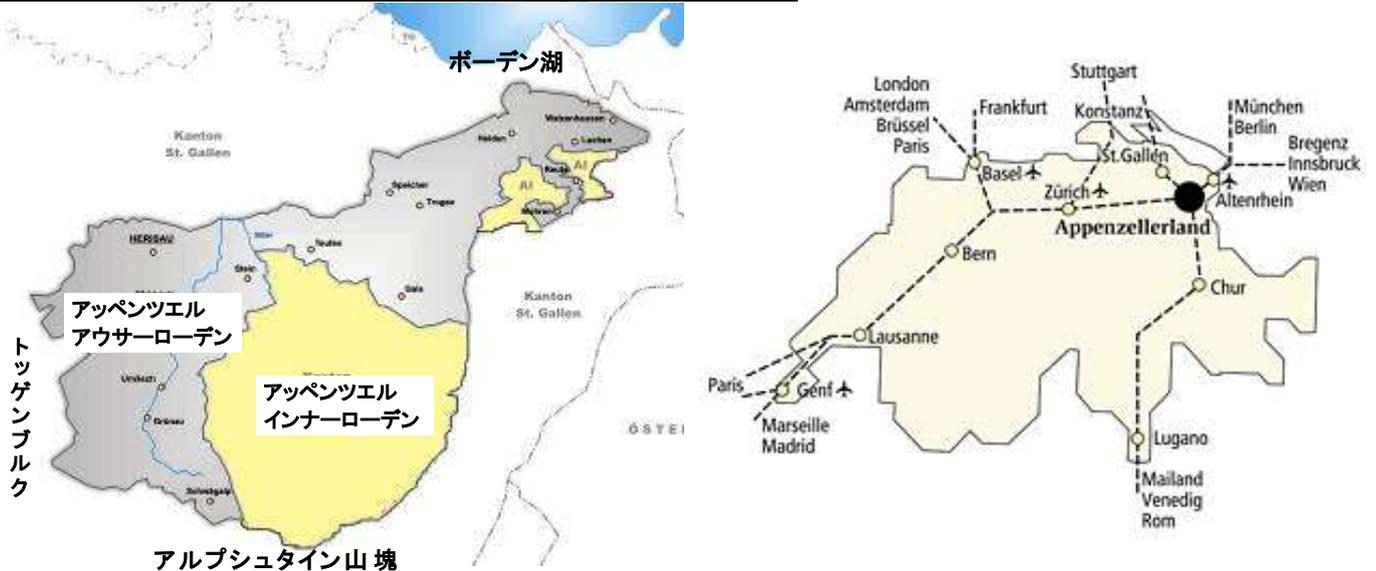


図4: Bartholomäus Lämmli (1809-1865) バルトロメウス・レムラー作 アルプに着いた牛たち 1854年

素朴画のゆりかご アッペンツェル地方 (Appenzellerland)



スイス北東部、ザンクト・ガレン市の南に広がる丘陵山岳地帯にあるアッペンツェル地方は、プロテスタント地域のアウサーローデンと、カトリック地域のインナーローデンからなり、西に隣接するトッゲンブルク地方と共に、独特の華やかな牧人文化で有名である。415km²におよそ7万人が暮らし、面積の半分以上が牧草地などの農地と森からなり、赤いローカル線「アッペンツェラーバーン」が小さな美しい町や村をつないでいる。

素朴画 ・ Bauernmalerei

Bauer(農民)+Malerei(絵画)は、農村地域で暮らす人々の用に供するために描かれた素朴な絵。

Möbelmalerei: 家具(Möbel)に装飾として絵を描いたもの。

Senntumsmalerei: 牧夫(Senn)を主題として描かれた絵。この地方独特の素朴画。

都市部の日曜画家が描いた素朴な絵は、「ナイーフ・アート」と呼ばれ脚光を浴び、好事家に収集された。この地方の素朴画(Senntumsmalerei)は、牧歌的な生活にあこがれてやってきた観光客の手に一部が渡ったものの、地元の酪農に従事してきた人々の営みの中で育まれてきた。

この地方の素朴画の系譜

見つかっている最古の素朴画は16世紀の壁画 …… 牛の群れを先導する牧夫、鳥たち、葡萄の木

17世紀半ば 富裕層の長持、ダンス、ベッドなどには、植物や動物のモチーフ。

18世紀半ば 旧約聖書の物語に題材をとった絵や狩猟の様子など、人物を配した絵が家具に描かれる。

Senntumsmalerei(酪農にたずさわる人々の生活を描いた絵)が登場しはじめる。

18世紀後半 農民や庶民の生活を描いた絵、写実的な立体感のある体。

晴れ着を着た農民夫婦、仕事場風景などが、ダンスにはめ込んだ板に描かれた。

19世紀初め 牧夫・農民・牛が盛んに描かれるようになる。

アルプ行列のとき、牧夫が肩にかつぐ桶につける飾り絵が登場。 図1

家畜小屋の軒下にアルプ行列の様子を描いた細長い絵を掲げる。 図5

家畜小屋の扉には、家主の農民の肖像画。家に人がいるように見せるだまし絵の一種。

19世紀半ば タンスにはめ込んだ板絵がすたれる。アルプ行列を描いた額絵が増える。

ほとんどの農家の台所兼居間には、そのような絵が貼られていた。 図2, 3

誰が描き、誰が買ったのか？ (Senntumsmalerei)

絵の注文主 : 酪農を営む牧夫や農民

絵のテーマ : もっとも大切な財産である牛とその主人である牧人たちの姿、アルプでの生活、風景、家など

描き手 : 村の職人、工場労働者、農家の手伝いをする労働者など、片手間に絵を描いていた人々



図5: Johannes Müller (1806 – 1865) Sennenstreichen
ヨハネス・ミュラー作 細長いアルプ行列の絵(家畜小屋の軒下に飾られた) 1865年ごろ

ある絵かきの一生 Bartholomäus Lämmli (1809-1865) バルトロメウス・レムラー

1809年、織布工の家の12子として生まれ、1816年から1817年の5人に1人以上が餓死した飢饉を経験する。臨時工、行商人、農家の下働きをしていたが、臨時収入を求めて絵も描いた。家具にはめ込む絵を得意としたが、家具絵が流行遅れとなり、絵を描く機会がうばわれた。晩年は日雇い仕事に明け暮れ、失意のうちに酒におぼれてアルコール中毒死。残っている絵は数少なく、額絵はたった3点しかない。しかし、かれの絵は1941年の「スイスのフォークアート展」にて絶賛され、今ではアッペンツェル地方の素朴画を代表する描き手とみなされている。伝統的な定形に従った絵ではなく、牧夫の誇りや自意識を前面に出し、たくましい牛のポーズもさまざまで、アルプの情景にはカモンカを狩る猟師やヤギ番、ヤギをさらう鷲、ハイカーなども描きこまれている。いろいろな生き物の営みが、レムラーの体内で熟成し、絵の中で再び命をえたような不思議な力が感じられる。 図4

牧人(Senn)の暮らし、キーワードは牧草

典型的な牧人

夏場(5月～9月)に牛を高地放牧地(Alp, Alm)へ追い上げる、移牧を伴う酪農は、ヨーロッパでは古くから広く行われている。里の牧草地では、冬用の干し草が作られた。高地放牧地でチーズやバターを作りながら、牛の世話をする牧人(Senn)は、各地でみられた伝統的な職業である。

典型的な牧人は、自分自身の家畜や土地をを所有せず、農民に雇われて夏の間かれらの牛をあずかり、冬場は他の仕事について。牧人に対する差別、蔑視の歴史もあった。山羊飼いは、牧人より地位が低かった。

この地方の牧人はひと味違った - 自分の家畜を連れて渡り歩く牧人

秋の牧草を牛たちが食い尽くし、雪や霜がアルムに冬の訪れを告げると、牛は持っているが干し草を持っていない牧人は、谷の農家を次から次へと渡り歩き、干し草を提供してもらう。訪れる農家はひと冬に5軒から8軒。アッペンツェル地方内だけではなく、東や西の近隣地域まで牛と共にあちこち移動するのである。

(Gais の牧師 Johann Rudolf Steinmüller 1804年)

アッペンツェル地方は、16世紀、穀物栽培を自家用のみに縮小し牧草地を増やして、酪農に重点をおく経済活動へと舵をきった。ザンクト・ガレンなど、近隣に酪農製品の消費地、市場があり、酪農製品とひきかえに穀物は南ドイツから入手した。南にそびえるアルプシュタイン山塊の中腹では牧草を栽培し、高地放牧地と低地放牧地として利用した。さらに牧人は冬場も牛を移動させることにより、近隣の地域の干し草まで手に入れていた。

牧草、干し草の量 → 飼える牛の頭数 → 酪農製品の生産量 …… 牧草、干し草は酪農経済の生命線

豊かな牧人(Senn)

自分の所有する家畜を夏期アルプに放牧し、秋から春は家畜や家族ともども里の農家数軒を渡り歩いて寄宿するというのが、この地方の牧人の暮らしであった。(17世紀、18世紀、19世紀の途中まで)

12頭以上家畜を所有 → Senn の身分に数えられた。

1828年、Sennは平均23頭の牛を所有。牛60頭、仔牛20～30頭をひきつれている Senn もいた。

貧しい谷の農家(Talbauer)

人口増加と分割相続、牧人によるアルプの私有地化の結果、谷の農家はだんだん小規模経営となった。

ほとんどの農家は、2頭から4頭の牛を飼える程度の牧草地しか所有してなかった。(18世紀末)

→ 自家用の食料のため1頭の牛を飼い、ほとんどの牧草は Senn に売る冬用の干し草となった。

谷の農家(Talbauer)と牧人(Senn)の連係プレー

農家は、干し草のほか、家畜小屋、住まい、食料、薪を Senn に提供、その代金と肥料を受け取った。独身の Senn が、農家の娘を見そめて結婚することも多かった。Senn を受け入れる農家は、家畜小屋や住まいを2世帯用に改造した。Senn を受け入れる余裕のない農家は、干し草だけを売った。

連係プレーの終わり

19世紀には、牧人が谷の土地を徐々に手に入れ、自分で干し草も作れるようになった。
→ 村に定住しながら、アルムを利用する牧人

1880年代の干し草価格の暴落 → 干し草を売ることをやめ、再び酪農経営に取り組む農家が増えた。優良な品種の牛の飼育が奨励され、よい牛を飼育し品評会で売って収入をえることも可能となった。

→ 牧人と農民の違いが、ほとんどなくなる。牧人習俗の担い手も多様化。

華やかな牧人習俗

牧人は得た富をどのように使ったのか？

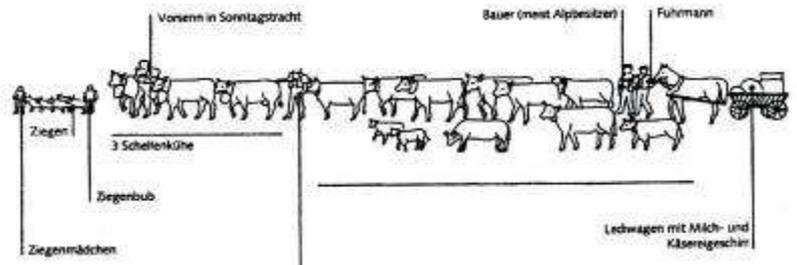
もっとも大切な財産である牛を増やす。市場で求めた。自分で繁殖飼育はしなかった。アルプに自分の所有地を確保する。
チーズ、バター作りに用いる白木細工の道具を作らせる。
着飾る ……アルムの生活に関連するモチーフをちりばめた晴れ着をしつらえる。
装飾品 …… ピアス、指輪、ブローチ、靴下留めのバンド、時計、時計の鎖
凝った装飾をほどこした日用品 ……パイプ、タバコ入れ、靴、犬の首輪
所有する牛と、着飾った自分の姿を絵に描かせた。19世紀に、もっとも多くの絵が描かれている。

牧人がもっとも好んだ絵・アルプ行列

全財産を従えて、牧人が初夏アルプへ向かう行列と、秋アルプからおりて来る行列。最大の年中行事で、富を披露する場であった。

行進の順番は厳密に決まっている。

1. 先頭に山羊追いの女の子と白山羊
2. 山羊飼いの男の子
3. 先頭の Senn (飾り絵のついた桶を担ぐ)
4. 3頭の大きなカウベルをつけた牛
5. 二人めの Senn、と手伝いの Senn たち
6. 牛たち
7. 農民またはアルムの所有者と犬
8. 御者とチーズ作りの道具を定められた順番に並べて積んだ荷馬車(Lediwagen) 馬に積む場合もある。
9. 豚



先頭の Senn が左肩にかける木製の桶の底には、自分と牛とを描いた飾り絵がはめ込まれている。みつかっている一番古い飾り絵は、1804年。アルプにつくと絵ははずされ、ミルク搾り用の桶として使われた。

アルプ行列の途中、歌詞のない素朴なヨーデルであるツォイエリが歌われる。

出発前と到着時には、3頭の先頭の牛につける特大カウベルを牧人が肩にかけ、その和音にあわせて特別美しいツォイエリが、響きわたる。 図3

現存する素朴画は、家畜小屋の壁で雨風にさらされ、農家の居間兼台所で燻され、桶の飾り絵は摩滅して、汚れがめだつものも多い。絵が牧夫や農民の生活を見守っていた時代は終わり、今はコレクションの対象にもなっている。アルプ行列もあたかも観光行事のように宣伝されている。

そのなかで、アッペンツェル地方の人々は洗練されてしまった牧人のイメージをもポジティブにとらえ、誇り高き牧人の姿を伝承しようと、今も200年前と同じ晴れ着をまとい、同じ主題の素朴画を描き続けているように思われる。